

登米市歴史博物館

博物館だより NO.24



伊達政宗塑像
(登米市立米谷小学校蔵)

目次

1. 企画展開催報告…… (1) 伊達政宗生誕 450 年記念「政宗と登米地方」 P. 2
(2) 「鉄道とくらし 2 ～思い出の仙北鐵道～」 P. 3
2. 次回開催予定企画展…… 「モノノケたちの夏～地域の化物ガタリ～」 P. 4
3. 校外学習報告…… P. 5
4. 講座について…… 春講座 P. 6～7
出前講座 P. 8
5. 平成 30 年度事業計画…… P. 9
6. 学芸員の研究ノート…… 「柳田國男と高橋清治郎～『来翰集』と
未刊『登米郡年代記』～」 P. 10～29

1. 企画展開催報告

(1) 伊達政宗生誕 450 年記念「政宗と登米地方」

(担当：小野寺)

【開催期間：《前期》平成 29 年 10 月 28 日（土）～12 月 10 日（日）

《後期》平成 30 年 1 月 6 日（土）～1 月 28 日（日）】

[全入館者数：2,448 名]

当館では、伊達政宗生誕 450 年記念事業として、政宗と登米地方とのつながりを紹介する企画展を、前期・後期のなかで展示資料の入れ換えを行いながら開催しました。

当館が建っている場所は、「佐沼城（別名：鹿ヶ城）」跡に位置しています。この城は、天正 19 年（1591）の葛西・大崎一揆最大の激戦地にして、最後の舞台でした。豊臣秀吉から一揆軍の討伐の命を受けた伊達政宗は、6 月 28 日に佐沼城を攻撃し、7 月 3 日早朝、ついに落城を成し遂げました。一揆の後、政宗は北の要衝である当地方に重臣・津田景康を置き、治めることとなりました。宝暦 6 年に津田氏が七代で改易となり、翌年、高清水から亙理倫篤が入封しました。亙理氏は、領主としてその後の明治維新まで当地を治めていました。

今回の企画展では、「郷土の偉人」や「葛西大崎一揆」のなかの政宗の位置づけと役割を、そして、政宗と係わりのあった登米地方を治めた領主たちについても紹介し、改めて郷土の歴史を学ぶ機会としました。

会期中には、2 回の展示解説と 11 月 23 日（木・祝）に宮城県公文書館 公文書等専門調査員の栗原伸一郎氏による「近代における伊達政宗の顕彰と仙台藩復権」と題した歴史講演会を開催し、近代の政宗の人物像と評価が地域社会にどのような過程で広まり、浸透していくのかを明らかにしていただきました。また、同月 26 日（日）には「葛西大崎一揆の激戦地・佐沼を歩く」を開催し、籠城の記録が残る「佐沼城跡」や政宗の陣場とされる「御陣場山」などの史跡を学芸員の解説を交えながら巡り歩きました。



歴史講演会の様子



史跡巡りの様子

(2) 仙北鐵道登米線廃線 50 年「鉄道と暮らし 2～思い出の仙北鐵道～」

(担当：小野寺)

【開催期間：平成 30 年 3 月 3 日 (土) ～ 5 月 27 日 (日)】

[全入館者数：2,989 名]

本年は、かつて登米・栗原地域を走っていた「仙北鐵道登米線 (通称：軽便っこ)」が昭和 43 年 (1968) 3 月 24 日に廃線となってから 50 年の節目の年にあたります。このことから、当館では館蔵資料をはじめとして、登米市並びに県内各所に保管されている関連資料を借用して、人々の生活のなかに鉄道が身近に存在していた風景を、当時を知る人には昔懐かしく、次世代には新たな発見と新鮮さを兼ね備えた展示を展開しました。

仙北鐵道は、大正 10 年 (1921) 10 月に仙北鐵道登米線が開通し、大正 8 年に敷設していた仙北鐵道築館線とともに地域の産物などを運搬することとなりました。それからというもの、仙北鐵道登米線は地域の馴染みの足としても親しまれていました。

しかし、戦後に自動車が普及し、交通網の整備が進むと鉄道を取り巻く状況が変化し始めます。こうして交通手段が鉄道から自動車へと移行していき、次第に仙北鐵道の利用者が減少を極め、経営を維持していくことが困難となりました。そして、とうとう昭和 43 年 (1968) 3 月 24 日、仙北鐵道は廃線となり、お別れ列車が走ってその歴史に幕を閉じました。

今回の企画展開催にあたり、登米市内外の鉄道関係者の貴重な史料や遺品、オーラルヒストリーなど様々な資料群をご提供いただきました。時が経つにつれ、人々の記憶からも姿を消しつつある大切な地域の歴史を保存・公開していくことの意義をととても感じる事ができました。しかし、仙北鐵道 OB・OG が年々減少していく現状のなかで資料収集方法の検討など、課題も多く見えています。今後は時を逃すことなく、地域住民の協力を得ながら調査・研究を進めていきたいと考えています。



お別れ列車に乗り込む人たち
(昭和 43 年 3 月 24 日 上沼駅)



展示解説の様子

2. 次回開催予定企画展

「モノノケたちの夏～地域の化物ガタリ～」

(担当:高橋)

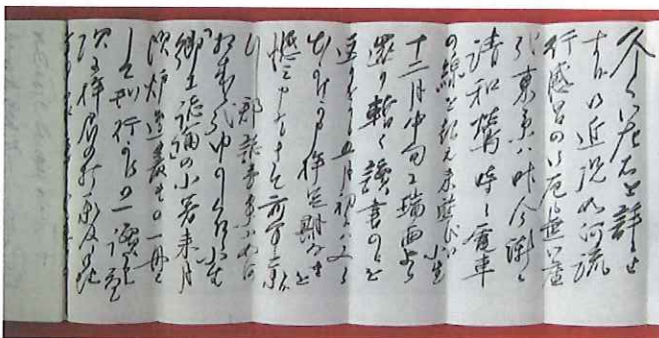
【開催期間：平成30年6月30日(土)～8月26日(日)】

この世には目に見えない異形のものたち～モノノケ(幽霊・妖怪・疫病神など)～が潜んでいると信じられています。それは、時には畏怖され、また時には娯楽の対象となりました。登米市やその周辺にはどのようなモノノケたちが潜んでいるのでしょうか。

これに関連して、登米郡南方村(登米市南方町)の郷土史家である高橋清治郎(1869-1944)は、登米地方に伝わるザシキワランなどの話を日本民俗学の祖・柳田國男や「日本のグリム」とよばれる佐々木喜善、悲運のロシア人東洋学者・ニコライ・ネフスキーなどの同時期の研究者に提供しています。今回は、様々な資料からモノノケに関する文化と夏の季節にぴったりの地域の化物ガタリを紹介します。



鎮守神の鬼退治 (三吉神社蔵)



高橋清治郎宛柳田國男書簡 (個人蔵)



瀧口内舎人渡辺綱 歌川国芳画
(村田町歴史みらい館蔵)

3. 校外学習報告

毎年当館では、小学校学習指導要綱及び教科書『小学3・4上』を基にした学校教育の一環として、昔の暮らしや時代とともに変遷していく民具などを、校外学習を通して見聞きし、直に触れて、様々なことを感じ取ってもらい、学習に役立てていただいています。

今年は、市内14校ならびに市外3校の小学3年生が校外学習に来館しました。小グループに分かれての学芸員の解説や博物館ボランティアが昔のくらしぶりを、実体験を通して語り、再現する姿は毎年ご好評をいただいています。見学後にご好意で贈ってくれる感想文やお手紙に館員一同励まされるとともに、微笑ましさと新鮮さに満たされ、博物館事業や展示方法に活かされています。すべての感想文は、児童の成長と学習の記録の意味を込めて館内に展示し、その心のこもった言葉の数々は、フロアに華を添えてくれています。

また、本年度は校外学習時期に合わせて、1月17日（木）から2月10日（日）まで（仮称）企画展示室開放期間「むかしの道具、なつかしい暮らし」を開催しますので、ぜひお楽しみください。



学芸員の解説の様子



質問やメモを取る様子

☆☆学校関係者の皆様へのお願い☆☆

当館では1年を通じて校外学習を受け付けておりますが、毎年1月中旬から2月初旬にかけての見学が大変込み合う状況です。学習効果を高めるために他校との重複を避け、午前・午後ともに1校ずつの来館でお願いをしています。つきましては、見学を希望される際にはお早目のご予約を推奨いたしますので、ご理解とご協力を何卒よろしくお願い致します。



博物館ボランティアから
当時の話を聴く児童の様子

4. 講座について

(1) 春講座 [全参加者数：67名]

毎年春の大型連休の時期に合わせて開催している春の講座。今年も地域の歴史や文化を学べる体験型の講座を行いました。

① 春を感じる＊お茶会＊ 【開催日時：5月3日（木・祝） 10：00～14：00】

博物館ボランティア及び地域住民と協力して、旧亙理邸を活用した裏千家のお茶会を開催しました。



② 歴史講座「ニコライ・ネフスキーがみた登米地方～高橋清治郎とオシラ様研究～」

【開催日時：5月4日（金・祝） 13：00～14：50】

登米市に関連した歴史について学芸員が研究成果を講演する第2弾として、次回開催予定の企画展「モノノケたちの夏～地域の化物ガタリ～」の予備知識となる講座を講義形式で行いました。



③ こどもの日記念「MY鯉のぼり箸袋作り」

【開催日時：5月5日（土・祝） 13：30～15：30】

「こどもの日」にあわせて、簡単に折れる鯉のぼり型箸袋を制作する親子向けの体験講座を開催しました。



④ 「史跡を巡ろう～佐沼てくてく歩き～」

【開催日時：5月6日（日） 13：00～14：45】

新緑に輝く史跡を、博物館→佐沼城本丸→西館→御陣場山→首壇→博物館のコースを学芸員の解説を聴きながら巡り歩きました。



(2) 出前講座

毎年、当館では市内の公民館や団体を対象に出前講座を受け付けています。すでに多くの施設から希望があり、学芸員により歴史や文化を学べる講座を開催しています。内容は、ニーズに合わせて見直し、毎年各種行事等に様々ご活用いただいています。

[本年度の講座ラインナップ]

講座名	内容	対象年齢	材料費	所要時間
街頭紙芝居	博物館に所蔵されている昔懐かしい紙芝居を上演します。	不問	なし	15～30分
歴史講座	登米市内(9町)の各地域の歴史・文化などのテーマに応じて当館学芸員が講演を行います。	不問	なし	1時間～1時間30分
史跡めぐり ※博物館周辺の史跡の案内ですので、博物館にご来館いただく必要があります。	博物館周辺の史跡について古地図などを使用しながら、当館学芸員と共に実際にめぐり歩きます。※歩きやすい服装と靴をご準備ください。	不問	なし	1時間～2時間
昔のくらし体験	衣食住を中心に、昔のくらしの知恵や現在にも活かされている生活、目にする機会が減った民具を紹介し、実際に見て触れることができる体験教室を開催します。	不問	なし	1時間～1時間30分
勾玉作り	古代のアクセサリーである「勾玉」を作る材料として滑石を使用し、オリジナルの勾玉を制作します。	小学4年生以上	100円	1時間30分～2時間



5. 平成30年度事業計画

企画展

「モノノケたちの夏
～地域の化物ガタリ～」

6月30日（土）～8月26日（日）

（仮称）戊辰150年企画展「幕末・明治
の登米地方～激動の時代を生き抜く～」

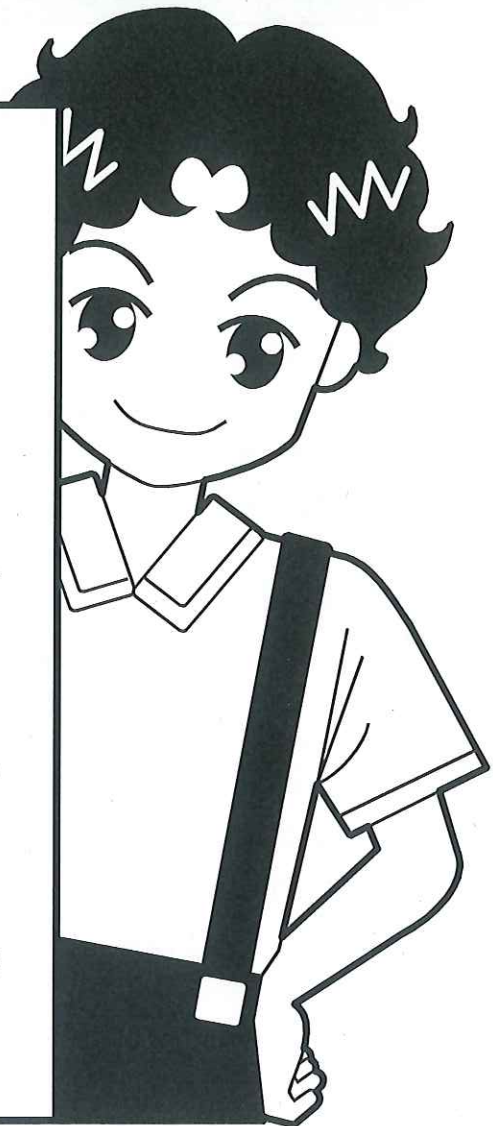
9月29日（土）～11月25日（日）

（仮称）企画展示室開放期間「むかしの
道具、なつかしい暮らし」

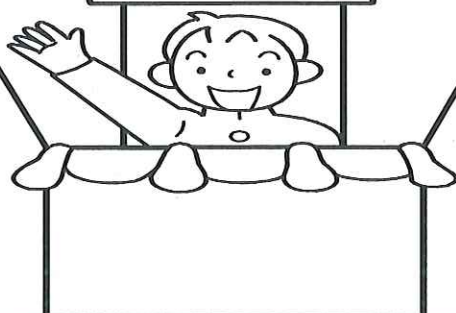
1月17日（木）～2月10日（日）

（仮称）伊達綱村没後300年展「お殿様
の教養～仙台藩の武家文化～」

3月16日（土）～5月19日（日）



歴史博物館友の会歴史講演会
「没後300年 仙台藩四代伊達綱村
書にみるその人と時代」
開催日時：11月23日（金・祝）
13：30～15：00
会場：登米祝祭劇場（小ホール）
講師：加藤秀一氏（友の会事業部長）



このほかにも

展示解説や

ナイトミュージアム、

博物館実習など、

盛りだくさんですよ！

6. 学芸員の研究ノート

柳田國男と高橋清治郎 ～『来翰集』と未刊『登米郡年代記』～

高橋 紘

はじめに

柳田國男は、『遠野物語』の作者であり、日本民俗学の創始者として知られる人物である。柳田の業績は数多いが、郷土研究社を組織して雑誌『郷土研究』の発行や炉辺叢書などを刊行するなど出版活動を精力的に行なったことが注目される。松本三喜夫氏は、『郷土研究』には、地方の郷土研究者たちとの交流と連絡網を構築し、組織化を図る狙いがあったと指摘している。また、柳田が刊行に深くかかわった『甲寅叢書』、玄文社版『炉辺叢書』、郷土研究社版『炉辺叢書』は、『郷土研究』によって交流をもった人々に研究成果を発表させようという意図があり、特に『炉辺叢書』は、ある意味では地方の人々との交流の集大成であったとしている(松本 1994)。柳田の出版事業は、柳田と地方の交流史でもあり、この交流によって地方の民俗事例を収集していったのである。

柳田と地方の郷土研究者の交流については、鳥畑隆治、胡桃沢勘内など個別研究の蓄積がある(小林 1966・1987、胡桃内 2004)。本稿で取り上げる高橋清治郎についても三崎一夫氏の先行研究があり、柳田との交流に言及している(三崎 1997)。

高橋清治郎は、『郷土研究』に宮城県登米郡(現宮城県登米市)の民俗事例を紹介し、後述するように『炉辺叢書』の1冊として『登米郡年代記』を出版する計画が進んでいた。また、大正9年(1920)8月には、柳田が清治郎のもとを訪れて情報交換を行なっている。両者の関わりは『雪国の春』所収の「おかみんの話」、『十三塚考』などから伺われる(柳田 1997、柳田・堀 1948)。しかし、『炉辺叢書』で続刊予告までされながら未刊となった『登米郡年代記』については、これまでわずかに言及されるに留まっている(1)。三崎氏の研究でも『登米郡年代記』への言及はなく、柳田の登米市周辺での動向には未解明の部分も多い。また、柳田との交流が清治郎の研究活動に影響を与えたのか否かも課題である。

そこで、本稿では柳田と清治郎との交流を都市部と農村の交流史と捉え、清治郎の御令孫宅で保管されていた柳田國男書簡と新出の『来翰集』所収の柳田國男書簡を紹介し、未刊『登米郡年代記』について考察する。

なお、本稿に際して清治郎の御令孫に平成29年(2017)12月27日、30年(2018)1月11日・19日、同2月2日と聞き取り調査を実施した。御令孫は、大正14年(1925)生まれで現在93歳である。柳田が清治郎宅を訪れたのは生誕以前であるが、20歳まで清治郎と同居していたこともあり貴重な証言を得る事が出来た。本稿では、御令孫の証言も適宜紹介しながら考察を進める。

1 高橋清治郎と『郷土研究』

まず清治郎の基本情報から確認したい。後述するように清治郎は、郷土史・考古学・民俗学において様々な業績を残し、柳田をはじめ佐々木喜善やニコライ・ネフスキー、松本彦七郎、柳宗悦など多様な交友関係を持っていた。そのため、ここでは柳田との関わりを中心に

概観し、その他の業績・交流関係については改めて論じたい。

清治郎は、宮城県登米郡南方村(現登米市南方町)の豪農であった高橋家に明治2年(1869)1月17日に生まれた。若くして代用教員の資格を得て、南方村東郷本地小学校・仙台市東六番丁尋常高等小学校などを経て、明治40年(1907)8月南方村本地尋常小学校の校長となり、大正11年(1922)1月に退職、昭和19年(1944)5月13日に76歳で死去している。清治郎は、在職中から私財を投じて地域の古文書の書写、青島貝塚(現登米市南方町)などの発掘、民俗学(当時は土俗学)など郷土史研究に没頭していた(三崎 1997、『南方村誌』を復刻する会 1998)。また、大正4年(1915)には『南方村誌』をまとめ、『登米郡史』『宮城県史』の編纂委員を務めるなどをしている。御令孫の話によれば、死去の三日間まで資料の書写を続けていたようで、机に向かっている姿が印象的であったという。清治郎関係資料は、没後に散逸した資料もあるようであるが、清治郎宛の書簡の一部と清治郎が書写した資料を含む和綴本などが現存している。

清治郎と柳田の交流が開始された時期は、書簡などから確認することはできないが、清治郎は、『郷土研究』に下記の投稿をしている(三崎 1997)。

「沽却禿のこと」3巻2号 大正4年4月

「国々の言習はし7一陸前登米郡」3巻3号 同年5月

「陸前登米郡南方村付近の俗信」3巻8号 同年10月

「陸前佐沼川の御前様」4巻4号 大正5年7月

「齒のまじないの多くの例(小通信)」4巻9号 同年12月

これによれば、清治郎は大正4年(1915)から投稿しており、この頃から柳田との交流が始まったと推測される。『郷土研究』は、大正2年3月(1913)に柳田と神話学者である高木敏雄によって刊行された。高木は同3年(1914)4月には編集から手を引き、以降は柳田が中心となって発行が続けられていく。清治郎が『郷土研究』に投稿したことは、交流関係の発展にも大きな影響を与えた。『郷土研究』は大正6年(1917)の第4巻12号で一時休刊となるが、12号の巻末には、「郷土研究」寄稿者及通信者芳名」が設けられ寄稿者・通信者名と住所が記載されている。清治郎のもとには、大正8年(1919)1月に佐々木喜善からザシキワラシに関する調査依頼や同9年(1920)2月にニコライ・ネフスキーからオシラサマの調査依頼がもたらされている。これらの調査依頼は、柳田からの紹介や「郷土研究」寄稿者及通信者芳名」をもとに依頼された可能性もあろう(2)。柳田の『郷土研究』発刊の狙いは、郷土史研究家の交流と組織化にあったが、清治郎もそのネットワークに参画していくことになったのである。

2 大正9年8月東北旅行と『登米郡史』

柳田は、清治郎のもとを大正9年(1920)8月に訪ねている。柳田は大正8年(1919)12月に貴族院書記官長を辞職し、翌9年8月に東京朝日新聞社の客員となった。柳田はこの年の8月2日～9月12日の旅行で、東北地方の太平洋沿岸を北上し、宮城県(仙台)から岩手県、青森県、秋田県を訪れており、この旅の紀行文を東京朝日新聞に送り8月15日～9月22日まで「豆手帖から」と題して19回にわたり掲載された。これは後に『雪国の春』に収められている(柳田 1997)。「豆手帖から」は、旅程の仙台～八戸間に該当し、柳田ひとりの

仙台から遠野までの旅、慶応義塾大学の松本信広を伴った遠野から釜石までの旅、松本と遠野の佐々木喜善を伴った釜石から八戸までの旅に分けられる(石井 2015)。柳田は、松本とロシア出身で親しかったニコライ・ネフスキーも誘っていたが、ネフスキーは事情により参加できず、柳田から少し遅れて東北旅行を行いその際に清治郎のもとを訪ねている。

柳田の大正9年東北旅行については、多くの先行研究がある(山内 1988、三崎 1999、石井 2015 など)。ここでは、それらを参照しながら柳田が清治郎のもとを訪れた状況をみていきたい。『雪国の春』に収録されている旅程の「図版」と「図版説明」によれば、柳田は、8月2日に東京を発ち、同月4日に仙台を出発して、野蒜・小野・石巻・女川浦・飯野川・登米・佐沼と進み一関に向かっている(石井 2015)。柳田が清治郎のもとを訪れたことは、「おかみんの話」から伺われる。「おかみんの話」は、原題が「「おかみん」の話」で9月16日に掲載されている。これは、オカミサン(口寄せ巫女)とオシラサマ信仰に関する内容で、オシラサマについて「佐沼の高橋清治郎氏は小さな御幣だと言われた。」と清治郎の証言を載せている。

柳田には、「豆手帖から」以外にも「大正九年八月以後東北旅行」(以下「東北」)と題した原稿がある。この原稿は、宮城県桃生郡小野本郷(現宮城県東松島市)から岩手県を經由して気仙大島(同県気仙沼市)までの部分が記載され、発表を考慮して「豆手帖」と重複しないように抜書きされたものと考えられる。ただし、作成時期は不明であり末尾が「村上雄策君の家であらうと思ふ。此」で中断している。幸いにもこの紀行文に登米方面の記載があり柳田が清治郎のもとを訪れた状況を復元することが可能である(丸山 2000、柳田 2015)。柳田は見聞を次のように書いている。

史料1 「大正九年八月以後東北旅行」『柳田国男全集』 25巻 2015

▽柳津の町から少し下流に大柳津がある。こゝが昔の柳津であらう。山の崎に大きな柳があつて石の鳥居があり、扁額に虚空蔵尊と題して居る。此辺に虚空蔵を祀つた鎮守はまだある。柳津の虚空蔵とは会津にも同じ地名があつて、こゝよりも有名である。

▽佐沼の周囲の村々には、暦の裏に其年の大事件を記入して保存する風がある。高橋清治郎氏諸所の旧家を採訪して其何十通を集めて居る。最も古いものが享保年中だといふ。

▽佐沼辺にも例の古碑が多い。最も古きは南方村にあつて建治某年、尚同村の正安何年かの碑には、念仏講何十何人の文字が見える。或は単に「今日所訪」又は「今日」とのみある例もあるといふ。石森町の古碑には、永劫何年云々といふ文字がある。

「東北」には、登米郡中田(現登米市中田町)、柳津(同市津山町柳津)、佐沼周辺(同市迫町佐沼周辺)、南方(同市南方町)、石森(同市中田町石森)に関する記載がある。このうち、登米郡中田の記載は、郡営開墾地に関するものである。

飯野川から柳津に入った柳田は、柳津虚空蔵尊を訪れた。柳津虚空蔵尊は、行基がこの地で虚空蔵菩薩を刻み、それを本尊としていると伝わる古刹である。

柳田はこの後、登米町^{とよま}を経由して佐沼町に入ったようである。佐沼の訪問は、清治郎と面会することが目的であった。三崎一夫氏によれば、この旅の目的のひとつが『郷土研究』で得られた人脈を訪ねることであり、柳田が清治郎に書簡でおおよその日程を伝えていたのではないかと指摘している(三崎 1997)。ただし、清治郎は佐沼町に隣接する南方村居住である。

佐沼部分で注目されるのが、佐沼周辺の村々で暦の裏にその年の出来事を記録する習慣があると記していることである。暦のうらの記録は、その性格から本稿で取り上げる「暦のうらの年代記」(以下「年代記」)のことである。後述するように柳田は、大正 11 年(1922)に「年代記」の出版を清治郎に持ちかけている。その依頼は、この時の見聞がもとになっているのである。そして、清治郎はその記録を大正 9 年(1920)段階で何十通も集めており、享保中のものが最古であった。

次に柳田は、佐沼周辺には古碑(板碑)が多いとして南方村と石森町の古碑についてふれている。登米方面より先に訪れた石巻部分の「東北」には、遠藤源七の石巻附近の古碑に関する見解を引いている。遠藤は、清治郎と交友のあった毛利総七郎(石巻市)と共に沼津貝塚(同市)などの発掘調査などを行っていた人物で、「石巻附近古碑年表」などをまとめている(遠藤 1934、毛利・遠藤 1953)。沼津貝塚は、柳田もこの旅で立ち寄ったことが「東北」に見える。文中に見える「例の古碑」は、遠藤の話を受けてなのであろう。また、南方村は、清治郎の居住地であり、古碑調査は、清治郎の案内のもとに実施された可能性が高い。なお、南方村の建治と正安の碑は、建治 3 年の碑と正安 2 年閏 7 月 15 日の碑のことであろう(南方町史編纂委員会 1976)。三崎一夫氏が、清治郎の御息女から得た証言によれば、柳田は清治郎宅に人力車で訪れ、柁目の桐下駄とピロードの鼻緒をすげた畳表の草履を土産に 1 泊したという(三崎 1999)(3)。

清治郎のもとを訪れた柳田は、オシラサマや「年代記」などの情報を聞き、古碑の調査を行った。では、柳田が清治郎のもとを訪れたのは 8 月の何日頃だったのだろうか。「東北」によれば、8 月 7 日に桃生郡十五浜村船越(現石巻市雄勝)で一泊し、その後、飯野川、柳津、登米、佐沼と進んでいる。ただし、先行研究では 6 日に飯野川に宿泊して一関街道を北上したとみており(山内 1988、三崎 1999)、柳田が登米方面に入った日時は判然としない。

次に柳田が登米地域から一関市(岩手県)に入った日時を考えてみたい。小林文夫氏の研究によれば、柳田は、東北本線で 10 日午前の一関市に入り、同市の清水屋旅館から長野県の胡桃沢勘内宛の書簡を書き、北上川の氾濫に遭遇した状況を「町の大水」に記している。また、これに伴い『郷土研究』に投稿していた鳥畑隆治を訪れることなく終わっている(小林 1987)。その後は 12 日に一関を出発し、岩谷堂、人首を経て、13 日に遠野へ入り 15 日に遠野を出発している。

ここまで確認したように柳田は、10 日午前には一関市にいた可能性が高い。柳田が清治郎宅に一泊したことを踏まえるならば、9 日に清治郎宅に滞在して 10 日の午前に瀬峰駅か新田駅、石越駅のいずれかから東北本線に乗車し、一関に向かったことになる。

また、前後関係を踏まえれば、清治郎宅以外に飯野川、柳津、登米、佐沼(南方村含む)のどこかで宿泊した可能性も高い。以上のことから登米方面に入った日時は判然としないものの「東北」の記載も考慮して 8~9 日の間は現在の登米市周辺に滞在していたと推定してお

きたい。

柳田は、この間に登米郡長であった半田卯内とも面会したようである。そして、この面会は当時編纂中であった『登米郡史』に柳田が関与する契機ともなった。

『登米郡史』は、大正6年(1917)、時の郡長であった半田卯内の指揮のもと編纂事業が本格化し、清水東四郎、藤原相之助らによって大正12(1923)年に発行されている。清治郎は、郡史編纂に編纂資料蒐集委員として参加し、『登米郡史』下巻の「登米郡史編纂の幹部」写真に掲載されている。半田が下巻の末尾に記した「郡史編纂の経過に就て」によれば、清治郎は郡史編纂のために自らが書写した資料など70余冊を貸し出すなど編纂資料収集で中核的な役割にあり、所有する資料群が重要な役割を果たしている。

柳田が清治郎のもとを訪れた大正9年(1920)8月は、『登米郡史』編纂が進む時期であった。半田は、柳田と郡史との関わりを次のように書いている。

史料2 「郡史編纂の経過に就て」『登米郡史』 下巻 大正11年(1922)3月31日

九年八月十四日、郷土史の研究に有名なる柳田國男君の来遊せらるゝあり。一夕会談示教せらるゝ処多し。君は全国の郡史百有余部を所有せらるゝ由に付其の中に就て模範となるべきもの数部の書目を示されたるに付、「福井県大野郡史」「長野県諏訪湖の研究」「同県東筑摩郡史」は各之を購入し「滋賀県阪田郡誌」は同君より貸与せられたるを以て編纂委員に廻送し参考として益を得ること少なからず。

面会日は9年(大正9年・1920)8月14日のことであったという。しかし、ここまで確認してきたように柳田が登米方面に滞在したのは、8月8~9日の可能性が高く14日には遠野に滞在していた。このため、柳田と半田が面会したのは、8月8~9日のいずれかの夜のことであったと推測される。

このとき、柳田は郡史編纂の助言と模範を示し、後に「滋賀県阪田郡誌」を貸し与え郡史編纂に協力している。このうち、「東筑摩郡史」の別冊には『郷土研究』に寄稿していた胡桃沢勘内を介して柳田自身も関わっていた(胡桃沢 2004)。

次章で紹介する史料番号(1)(史料番号(5))で郡史編纂の進捗状況に言及し、同書簡及び史料番号(4)で半田への挨拶依頼を記しているのは、柳田もこのとき半田に面会し、郡史編纂に関与していたことが背景にあるのである(4)。

3 『来翰集』と柳田國男書簡

『来翰集』は、清治郎宛の書簡を書写し、年代順に整理して1冊にまとめたものである。罫紙を用い筆書きで記されている。今回は、御令孫宅に保管されていた複写本をもとに考察を進める。収録されている書簡は、明治43年(1910)のものも確認できるが大正年間が主である。ただし、清治郎宛の書簡全てが所収されているわけではなく、一部を選び取り収録しているようである。『来翰集』所収の原本は、今のところ本稿で取り上げる柳田國男書簡1通を確認している。清治郎の没後に散逸したことも考えられる。また、御令孫によると、生前にトラック1台分の資料を譲渡したとのことで、この時に流出した可能性も想定される。収録書簡をまとめたものが文末掲載の表1である(5)。

ここまで、『来翰集』の基礎情報を確認した。これを踏まえ、以下に柳田書簡の翻刻を紹介する。凡例は下記の通りである。

【凡例】

- 1 旧字体・異体字・俗字は常用字体とした。ただし、人名のみ史料上の表記のままとした。
- 2 変体仮名は、平仮名に直した。
- 3 翻刻者が注記した場合は、[]で示した。
- 4 割注部分は〈 〉で示した。
- 5 改行は原文に従った。
- 6 清治郎が読み取れず空欄とした箇所はそのままとした。
- 7 便宜的に書簡ごとに史料番号を付した。

史料番号(1)

柳田國男氏書翰 〈法学士、元貴族院書記官長、為土俗学泰斗、
東京日々新聞記者、〉

久しく御左右を詳にせず候御近況如何流行感冒の
御厄も無御座哉東京ハ昨今漸々清和鶯時々電
車の線を超え来遊び候小生十二月中旬に瑞西より
還り暫く読書 を送りをり候五月初にハ又々出か
け可申拝眉期なきを憾ミ申候さて前年承り候
ひし郡誌事業ハ如何相成候哉ゆかしく候小生「郷土
誌論」の小著来月頃炉辺叢書の一冊として刊行可
仕御一読被下度候次に拝眉の折承及の御地方旧
家に伝ハれる暦のうらの年代記ハあの後も追々御
集め被成候哉これハ至つて珍しき史料=付可相成ハ其
まゝ一小冊子=まとめ置度ものと存候凡そどの位の分量
有之候やもし思召もあらバ年次順に御写取被下貴

史料番号(2)

初かへり来り候あまりに御無沙汰不相濟なから御左
右をうかゝひ上候何かおもしろき新御発見ハ無之哉
暦の裏の年代記ハ其後尚あつまり候哉

三月十六日

史料番号(3)

年代記ハ家毎 年月順に御書写被下べく候
御手紙拝見仕候年代記標注の方法其他は御希望に従ひ
且つなるべく体裁のよろしき風活版所の方へ作り上げ方
指図可仕候=付何とぞ御著手被下へく候小生は五月
々初に再び出発仕候為万事岡本お千秋君〔岡村千秋か〕へ委任いた
し置候直接郷土研究社の方へ御相談被下べく候
四月二十六日

史料番号(4)

又再び漫々たる海の上えまで来申候昨年十
一月満月セイロン村々の盆の節にあひ候ひしが六ヶ月を
へだて、昨夜ハ新月恰も此地の除夜新年に り
候も一奇に候半田氏=ハ折々御逢に哉御序あ
らバよろしく

年代記早く御まとめ賜ハリ度候

五月二十三日 コロンボにて

柳田國男

宮城県登米郡南方村

高橋清治郎様

史料番号(1)は、途中で途切れてしまっている。しかし、幸いにもこの書簡の原本が残っており、すでに佐沼古文書の会によって解説、報告されている(佐沼古文書の会 2008、太布 2009)。柳田書簡を考察する上で重要な資料であり、以下にその書簡を紹介する。この翻刻案は、筆者が所有者である御令孫のご協力のもとに史料を閲覧し、佐沼古文書の会の翻刻案を参考に作成したものである。凡例は『来翰集』に従ったため、佐沼古文書の会の翻刻案と異なる点がある。なお、下記の史料番号(5)と史料番号(1)で一致しない箇所もあるがそのままとした。

史料番号(5)

陸前登米郡南方村

高橋清治郎様

侍史

東京牛込区加賀町

二ノ十六 柳田國男

久しく御左右を詳にせ
す候御近況如何流
行感冒の御厄も無御座
哉東京ハ昨今漸々
清和鶯時々電車
の線を越え来遊び候小生
十二月中旬に瑞西より
還り暫く読書の日を
送りをり候五月初にハ又々
出かけ可申拝呈期なきを
憾ミ申候さて前年承候
ひし郡誌事業ハ如何
相成候哉ゆかしく存候小生
「郷土誌論」の小著来月
頃炉辺叢書の一冊と
して刊行可仕御一読被下度候
次に拝眉の折承及候御地
方旧家=伝ハれる暦の
うらの年代記はあの後
も追々御集め被成候哉これハ
至って珍しき史料に付
可相成ハ其まゝ一小冊子=
まとめ置度ものと存候凡そ
どの位の分量有之候やもし
思召も^[ママ]於らハ年次順に御写
取被下貴公自ら解説の
序文を加へられ炉辺叢
書の中へ御入被成候てハ如何
同叢書は将来地方研
究の資料となるへきものを
各地交換する趣旨=て篤
志者の資金により今後
追々興味ある小冊子を刊
行いたし候今日迄=出候
飛驒の鳥
三州横山話
の二書は共=前類なき奇
特千万の書=有之此より琉

球大島=関するものなとも現
れ来る予定=有之候
半田郡長ハ機嫌よく暮
しをられ候哉御序も於^[ママ]らハよろ
しく御伝へ給ハリ度候也
草々不一
二月二十一日 柳田生
高橋大人さま

以上が翻刻文である。次に、内容と性格について考察していきたい。なお、史料番号(1)は、史料番号(5)を原本としており、あわせて考察することとする。

史料番号(1)

本書簡は、途中で途切れてしまっている。この途切れが清治郎の書写に伴うものなのか、後の複写作業により発生したものかは不明である。内容から史料番号(5)を書写したものと確認できる。

原本は封筒も現存し、巻紙に筆書きである。封筒には3銭切手を使用されている。消印は半分で切れ、インクがかすれているために判読が難しい。ただ消印の2段目に微かながら「22」の数字が確認でき、2月22日の消印かと推測される。法量は広げた状態で、縦20×横108センチメートルである。

清治郎の住所は、現在の宮城県登米市南方町にあたり、「陸前」以下は「郷土研究」寄稿者及通信者芳名」と一致する。

柳田の住所は、現在の大妻女子大学大妻加賀寮に該当する。柳田は、明治8年(1875)に現在の兵庫県神崎郡福崎町の松岡家に六男として生まれ、明治33年(1900)に東京帝国大学を卒業して農商務省に入省、翌34年(1901)に柳田直平の養嗣子となっている。このときから昭和2年(1927)に世田谷区成城に移るまで、一部官舎生活をはさみながらここで過ごしている。(田野崎 2010)。

内容は、昨年12月に瑞西(スイス)から帰国したが5月からまた出かけること、郡誌事業の進捗状況の確認、『郷土誌論』の発刊、「年代記」の出版依頼と『炉辺叢書』の紹介、半田郡長への挨拶依頼となっている。本書簡の年号は記されていないが、記載内容から推定することが可能である。

まず、柳田は12月にスイスから帰国したとしている。柳田は、大正10年(1921)～大正12年(1923)の間、途中帰国を挟みながら、国際連盟委任統治委員会委員としてジュネーヴに赴任している。柳田が一時帰国したのは、大正10年12月のことで、再度、渡欧したのは大正11年(1922)5月8日のことであった(柳田 1964)。このことから本書簡は、スイスから一時帰国していた大正11年に書かれたものと推測される。また、『郷土誌論』は、郷土研究社より大正11年3月に刊行されている。以上のことから、本書簡は大正11年2月21日付のものであるといえよう。佐沼古文書の会も同様に大正11年の書簡と推定している。

次に郡誌事業(登米郡史)についてである。登米郡史編纂と柳田の関わりは、第2章で詳述

したとおりである。また、本書簡で『郷土誌論』の発刊を知らせ、読むように薦めているのも郡誌編纂が背景にある。『郷土誌論』は各地方の郷土誌編纂者に向けて郷土研究の理念と方法を説く内容であり、『登米郡史』編纂の参考とするように薦めているのであろう。このことも清治郎への出版依頼がこの時期になった一因である。

そして、本書簡の中心である「年代記」と『炉辺叢書』である。「年代記」については第4章で詳述するが、確認したように柳田は大正9年(1920)に清治郎を訪ねた際にその存在を認識している。なお、柳田は本稿で取り上げる書簡全点で「年代記」に言及している。

柳田が出版の打診をした大正11年(1922)2月は、郷土研究社版『炉辺叢書』の刊行が始まっており、大正10年(1921)9月から昭和4年(1929)の間に36冊が刊行されている(6)。川口孫三郎の『飛驒の鳥』はその1冊目であり、早川孝太郎の『三州横山話』は、大正10年12月に刊行されている。発刊予定のうち「琉球」としているものは、伊波普猷の『古琉球の政治』(大正11年3月刊)、佐喜真興英の『南島説話』(同年5月刊)などのことであろう。

史料番号(2)

本書簡は、前半部分に欠落があり大正11年(1921)の書簡に挟まれているが、大正10年(1920)の書簡の可能性もある。詳細は文末の「追記」を参照されたい。内容は無沙汰を詫び、新発見はあったか尋ねている。そして、「年代記」は引き続き収集しているか気にかけるものである。

史料番号(3)

本書簡も内容から年号の推定が可能である。柳田の二回目のジュネーヴ行きは、大正11年(1922)5月7日に東京を出発し、8日に神戸港を出港している。この時に柳田は、『炉辺叢書』を岡村千秋に一任している。前述のように郷土研究社版『炉辺叢書』は、大正10年(1921)9月に『甲寅叢書』、玄文社版『炉辺叢書』を引き継ぎ発行が開始されている。柳田は、大正10年5月8日からスイスへ向け出発しており、この間の『炉辺叢書』は岡村によって支えられていた(荒井 1996)。また、本書簡でも「年代記」が話題として挙がっており、大正11年2月21日より後のものであることが確実である。よって、本書簡も大正11年のものと判断してよい。

文中に見える「岡本お千秋君」は、「岡村千秋」の誤記と考えられる。岡村千秋は、明治17年(1884)5月17日に長野県南安曇郡明盛村(現安曇野市)に生まれ、柳田との出会いは、早稲田大学を卒業した明治40年(1907)11月の事であった。次第に柳田と親密となった岡村は、明治42年(1909)に柳田の長兄松岡鼎の次女しげと結ばれている。柳田は、大正3年(1914)3月に雑誌『郷土研究』を刊行するが、岡村は、編集兼発行者として参画している。また、発行所である郷土研究社は、岡村宅に置かれている。これ以降、岡村は柳田の出版事業に深く関与していく(荒井 1996)。

清治郎は、この書簡に先立って柳田に書写の形式や標注の方法について問合せたようである。それに対して柳田は、年代記は家毎に年月順に書写することと標注の方法などは清治郎の希望通りでよいので着手してほしいとする。また、柳田自身は5月初めには出発するので、あとのことは郷土研究社の岡村千秋へ問合わせるようにとしている。

本書簡で注目されるのが、「年代記」の出版に対する清治郎の態度が垣間見える点である。

本書簡によれば清治郎は、「年代記」の出版に前向きであったことが窺われる。

史料番号(4)

本書簡も「年代記」に関する記載を含む。柳田は、昨年 11 月のセイロン(スリランカ)での見聞を記している。柳田がスリランカを通過したのは確認できる限り、スイスから一時帰国する大正 10 年(1921)10 月 25 日～12 月 8 日の船旅と二度目にスイスに向かう大正 11 年(1922)5 月 8 日～6 月 14 日の船旅である(柳田 1964、柳田国男研究会 1988)。

大正 10 年(1921)の船旅は、10 月 25 日にマルセイユからクライスト号に乗船し、インド洋を経て 12 月 8 日に神戸港に到着している(柳田国男研究会 1988)。それに対して、大正 11 年(1922)は、神戸港から箱根丸に乗船してインド洋経由でマルセイユに着いている。この旅は、柳田の「大正十一年日記」から伺うことができる。これを「年代記」の記載と合わせて考えると本書簡が大正 11 年以降であることが確認でき、文中の「昨年」は、大正 10 年の可能性が高い。また、史料番号(3)が二回目の渡海直前に書かれたものであることを踏まえれば、本書簡は、二度目のスイス行きの船旅の最中であった大正 11 年 5 月 23 日付のものと推定できる。

ただし、この日付には注意が必要である。本文中では、5 月 23 日にコロombo(スリランカ)とされている。だが、「大正十一年日記」によれば、23 日時点ではシンガポールに停泊し、同日午後 5 時に出港している。その後、25 日にペナン島(マレーシア)へ上陸しながら、5 月 31 日にコロomboに到着している。これに従えば、23 日にシンガポールを出港したのちに作成し、コロomboで発送したということになるだろうか。また、28 日の日記には、「手紙をかく、けふも風つよし」とありこの時に作成された可能性も想定される。

内容は、船旅に出た挨拶と昨年 11 月の経験・昨夜の新月に感じたこと、半田卯内への挨拶依頼となっている。

ここまで、『来翰集』の基本情報を整理し、「柳田國男氏書翰」部分と書簡 1 通を紹介してきた。一連の書簡で確認できるように柳田の関心は「年代記」にあった。その性格について章を改めて考えてみたい。

4 高橋清治郎と未刊『登米郡年代記』

柳田は、「年代記」に関心を示し、一連の書簡で早期の取りまとめを依頼している。史料番号(3)から清治郎が標注などの問合せを行なったことが推測され、清治郎も刊行に前向きであったようである。現在のところ清治郎の草稿は確認できないが、清治郎関係資料のなかに『暦面裡書』と題された和綴本 10 冊が現存している。『暦面裡書』は、登米郡を中心に「年代記」を家毎に年代順で収録した資料群で、現在のところ 10 冊を確認している。このうち、表紙に通し番号が「壺」～「七」まで付されたものは、「高橋氏蔵板」と印字された罫紙などに筆書きされている。残りの 3 冊は表紙に収録家名を記すのみで、原稿用紙にペン書きされている。御令孫の話によれば、清治郎は晩年に万年筆などを使用したとのことで、清治郎の「年代記」収集は、晩年まで続けられたようである(7)。

『暦面裡書』の体裁は巻で異なる箇所があるが、壺～五巻は目次が付され、所蔵家ごとに年代順に配列して簡略な見出しが付されている。記載内容は、自然災害や気象、領主の改易、飢饉の状況、百姓一揆、日々の諸事など多岐にわたっている。

第2章で確認したように大正9年(1920)8月に清治郎のもとを訪れ、「年代記」の存在を認識した。この時点で清治郎は何十通の「年代記」を収集している。清治郎がこの資料に注目したのは、自身の家にも存在したからであろう。清治郎宅の「年代記」は、明治25年(1892)～同36年(1903)のもので、例えば次のような記載がある。

史料3 「南方村大字東郷新田字大村高橋清治郎家曆面裏書」『南方町史』 資料編
1975

明治廿五年。六月入梅ヨリ五日目田植初ル。此年田植ハ旧五月廿四五日頃ハ上等ノ季節ト思ハル。陰曆九月六日霜降泉水氷ル。

明治廿六年。^{〔旧正月十一日〕}二月廿七日大ニ暖ク氷流ル。^{〔旧三月廿日〕}五月五日鶏卵一個四厘同二十日五厘、^{〔旧四月五日〕}六月七日^{〔旧四月廿三日〕}苗代かき初む。^{〔旧四月廿八日〕}同月十二日鶏卵一個六厘五毛。田のみな口は二百廿日前後稲の模様によりて切るべし。

清治郎宅にあった「年代記」には、田植えの記録や気候、鶏卵の値段などが記録されている。明治2年(1869)生まれの清治郎も「年代記」の習慣を認知していた可能性が高いであろう。清治郎の調査を伺わせる資料として『来翰集』の二木芳次郎・岡上梁書簡の次の記載が注目される。

史料4 二木芳次郎書簡 明治43年(1910)11月22日

拝啓 今朝の寒さ一しほ身にこたへ候尊堂の附近
さぞかし黄葉の見事なるべくと存し上げ候扱一昨日御話しの古曆のつゞき天明乙巳より文化戊辰に至るもの送上候間ゆる〜御調査可被成候先は
用事のみ早々 不一

十一月廿二日

二木生

高橋賢台 座下

史料5 岡上梁書簡 大正3年(1914)10月22日

拝啓時下益御清祥奉大賀候陳は石森の暦
の中ニ在る白毛(地震の時降りしとの話)ニ付本日当校の地質学の教師ニ尋候処之れは事実なる事ニ
て火山の爆発の際溶岩のどろ〜したものを強き水蒸気が吹き散らして飛ばしたるものニ由ニ候本年の桜嶋爆発の時ニも飛ばしたるものを拾ひたる人
有之^{〔ママ〕}・由ニ候石森のものは浅間か磐梯山かの噴出物かと被存候 右御報知申上候 時下益御自

愛願上候 敬具

鹿児島第七高等学校

造士館

大正三年十月二十二日 岡上梁

宮城県登米郡南方村本地小学校長

高橋清治郎殿

二木芳次郎は、登米郡石森町(現登米市中田町石森)の人で、清治郎と旧制佐沼中学校(現佐沼高等学校)の岡上梁校長・木村梅太郎らと歴史地理会を組織し、古文書などの調査を行っていた。この11月22日書簡は、配置順から明治43年(1910)のものと推測される。清治郎は二木から、天明乙巳(天明5年・1785)より文化戊辰(文化5年・1808)に至る古暦を送付されており、この頃には古暦の調査を行なっている。

岡上梁は、土佐(現高知県)の人で、明治43年(1910)～大正3年(1914)8月まで旧制佐沼中学校長を務めている。なお、二木と同じく清治郎と歴史地理会で活動し、会長を務めていた。大正3年9月に鹿児島県の第七高等学校造士館教授に転任し、その後、新潟高等学校長、浦和高等学校長を務めている(佐沼高校百周年記念誌編纂委員会 2005)。大正3年10月は、岡上の転任直後である。清治郎は、岡上から「石森の暦」に記載のあった「白毛」の調査報告を受けている。以上のことから清治郎は遅くとも明治末～大正初期には古暦に関心を持ち、調査と書写を進めていたことが明らかである。大正6年(1917)以降は、登米郡史編纂委員としてさらに調査を行ない「年代記」収集が進められたことが想定される。

文献史学に批判的であった柳田が、「年代記」に興味を持ったのは、暦の裏面にその年の出来事を記すという習俗紹介に留まらず、人々の日常生活を復元できる史料として「年代記」を捉えたからであろう。以上のような認識のもと柳田は史料番号(1)(史料番号(5))で出版を依頼するのである。しかし、「年代記」は出版されること無く終わってしまった。

『炉辺叢書』の巻末には、「既刊書目」と「近刊」、「続刊」の一覧が付されている。近刊は後に続刊に統一されたようである。このうち未刊本が37冊もあるという(松本 1994)。この未刊本のなかに清治郎の『登米郡年代記』を確認することができる。『登米郡年代記』は大正11年(1922)6月に発行された小池直太郎の『小谷口碑集』の続刊予告に掲載されたのを皮切りに、現在のところ松本芳夫編『熊野民謡集』の昭和2年(1927)7月25日再版本の巻末にはその記載を確認でき、同年8月28日発刊の雑賀貞次郎『牟婁口碑集』では確認できない。これによれば、清治郎の『登米郡年代記』は、大正11年6月～昭和2年7月までは刊行予定とされていたことが伺われる。なお、『牟婁口碑集』では、『登米郡年代記』を含む続刊予定が大幅に削減されている(8)。

では、なぜ、『登米郡年代記』は未刊となったのであろうか。その理由を直接示す資料は確認できないが、清治郎は大正11年(1922)・12年(1923)まで『登米郡史』編纂に注力しており、この間は原稿に取り掛かれなかったのだろう(9)。また、不明な点もあるが、大正15年(1926)の小田島禄郎宛書簡では、自身の体調不良にふれ(岩手県立博物館 2015)、御令孫の話などによれば清治郎は眼病を患い、右目を摘出するなどしている(『南方村誌』を復刻する会 1998、三崎 1997)。これらの事を踏まえるならば、清治郎側では多忙と体調不良などから原稿に取り掛かれなかったことが想定される。

柳田側の状況としては、郷土研究社の経営状況を考慮する必要がある。郷土研究社の経営は決して楽なものではなく、『炉辺叢書』が昭和4年(1929)に発刊中止になった要因も経営状態にあったとする見解もある(荒井 1996)。前述のとおり昭和2年(1927)8月28日発刊の『牟婁口碑集』で続刊予告が整理されたのもその文脈で解釈すべきであろう。

このようなことを背景として清治郎の『登米郡年代記』は未刊となった。この後、『暦面裡書』は平重道氏が研究に使用し、『南方町史』の資料編に一部収録されるなど部分的な紹介に留まっている(南方町史編纂委員会 1975)。

これ以降の両者の交流は、現在のところ確認することができない。しかし、柳田は大正9年以後も度々仙台・宮城県を訪れており(鈴木 2009)、清治郎と面会した可能性もあろう。

おわりに

ここまで、柳田國男と高橋清治郎の交流関係から『登米郡年代記』が未刊となるまでの経緯を考察してきた。推測に推測を重ねた感があるが、まとめれば以下の5点である。

- ① 高橋清治郎は『郷土研究』への投稿を通して大正4年頃から柳田國男の郷土研究社ネットワークに参画することとなった。
- ② 柳田は大正9年8月の東北旅行によって、「年代記」に関心をもち、その収集家でもあった清治郎に、『登米郡年代記』の出版を薦める契機となった。
- ③ 大正9年8月の東北旅行において、柳田は『登米郡史』編纂事業にも関与することとなる。同事業には清治郎も深く関わっていた。
- ④ 『来翰集』の清治郎宛書簡によれば、柳田は清治郎に「年代記」の収集継続と出版を促しており、清治郎も刊行に前向きであった。
- ⑤ 柳田が薦め、清治郎が目指した『登米郡年代記』は、清治郎側の多忙・病身や、柳田側の経営状況の悪化などを背景として未刊に終わる。

柳田と清治郎は『郷土研究』で結びつき交流を重ねた。両者の出会いは、小学校教員の傍ら郷土史研究に注力していた清治郎の民俗学的な成果を公表する機会となった。『登米郡史』をその成果と評価することも出来よう。両者の関係は出版事業を通じた都市部と農村の交流史でもあり、現在の登米市周辺の地域史の重要な一齣である。ただし、第一章で示したように清治郎の交友関係は柳田に限定されない。今後は、清治郎の交友関係の解明をさらに進めていく必要がある。また、本稿では、言及できなかったが「年代記」の基礎研究も進めていく必要がある。今後の課題としたい。

【追記】

本稿の執筆にあたり、資料所蔵者の皆様には多大なるご配慮を頂いた。ここに記して感謝申し上げる次第である。

なお、成稿後、『来翰集』の自筆本を確認した。自筆本調査により今回考察に使用した複写本の史料番号(1)から(2)の間に、2頁に渡る複写漏れが確認された。これにより史料番号(1)の途切れは、複写本作成に伴う途切れであることが明らかとなった。

欠落部分には、史料番号(1)後半部分と書簡1通、史料番号(2)の前半部分が収録されていた。史料番号(1)は本稿で原本を紹介済みのため、以下に書簡1通と欠落部分を補った史料番号(2)

を紹介する。

追加史料番号(1)

早速御返礼忝く拝読仕候甲寅叢書ハ悉く出は
らひ申候追々再版心かけをり候新刊炉辺叢書ハ
御目につけ可申候学校等の御購読御すゝめ被下度
曆背記文の御編ハ 登米郡年代記 と題してハ如
何に哉巻頭に説明を御添へ被下又イロハの符を附
して十六家分編次を 候ハ、優に此書名にかなひ
可申と存候小生ハ早きをのそみ申候

東京牛込区加賀町二ノ十六

三月四日

柳田國男

陸前登米郡南方村

高橋清治郎様

追加史料番号(2) (史料番号(2))

冬中御障も無く哉郡誌の御事業引つゝき御辛苦
の御事と存上候小生久しき間九州沖繩を旅行し月
初かへり来り候あまりに御無沙汰不相濟なから御左
右をうかゝひ上候何かおもしろき新御発見ハ無之哉
曆の裏の年代記ハ其後尚あつまり候哉

三月十六日

追加史料番号(1)により『登米郡年代記』の書名が柳田の提案であったことが判明する。また、この書簡で体裁についても指示をしている。清治郎が標注の方法などを問合せたのは柳田からの提案を受けてのようである。

追加史料番号(2) (史料番号(2)) は、前半部分に欠落があり、そこには郡誌編纂事業を気にかけていること、月初めに九州沖繩旅行から戻ったことが記されていた。ここで問題となるのが、月初め(3月初め)に九州沖繩旅行から戻ったとしていることである。本書簡は、大正11年(1922)に推定される史料番号(1)と史料番号(3)に挟まれている。しかし、柳田が大正11年に九州沖繩を訪れた形跡は、管見の限り確認できない。

ただし、大正10年(1921)には九州沖繩を訪れ3月1日に帰宅している(柳田国男研究会 1988)。このことから追加史料番号(2) (史料番号(2)) は、大正10年(1921)の書簡の可能性もある。『来翰集』編纂の際に清治郎が誤って配置した可能性もあるが、書簡の原本が確認できず判断が難しい。

本書簡が大正10年(1921)のものだと推定できれば、柳田は同年から「年代記」に関する問合せを始め、同11年(1922)に『登米郡年代記』の出版を依頼したことになる。この書簡の位置づけを含め後考を期したい。

【注釈】

- (1) 松本三喜夫氏の「柳田国男と「爐邊叢書」」(1994 『柳田「民俗学」への底流』 青弓社)がその存在に触れている。
- (2) 佐々木喜善は、「佐々木繁」の名前で岩手県の欄に確認できる。ネフスキーの名前は確認できないが、東北旅行の際に柳田から福島県の高木誠一の紹介を受けた例がある。また、ネフスキーの大正9年(1920)2月22日付書簡では、ネフスキー宅の女中(佐沼町出身)の証言を引いており、佐沼町に近い清治郎へ調査依頼をした可能性がある。
- (3) ただし、今回聞き取り調査を行った御令孫は、この話に聞き覚えがないとの事である。
- (4) 柳田は、『蝸牛考』(昭和5年)、「人柱と松浦佐用媛」(『妹の力』所収・昭和15年)などで『登米郡史』から事例を引き自身の研究に活用している。
- (5) 紙数の限りもあり全てを紹介することは出来ないが、岡上梁・木村梅太郎・二木芳次郎の書簡は、清治郎が所属していた歴史地理会の活動に関わるものが中心、半田卯内・清水東四郎の書簡は、『登米郡史』編纂に関わる内容が中心である。

山中樵・松本彦七郎・齊藤養次郎・毛利総七郎・長谷部言人・千葉正太郎・佐々木久四郎の書簡は、考古学に関わるもの、特に発掘調査地の紹介依頼や清治郎が発見・発掘を行った青島貝塚などに関わる内容が中心である。松本彦七郎は、東北帝国大学教授を務めた人物で、清治郎の協力のもと大正8年(1919)に青島貝塚の発掘調査を行っている。松本の書簡は、同年4月8日付書簡から収められており、青島貝塚発掘の経緯を復元できる内容である。伊勢齊助・三上喜市・櫻井順蔵・加藤善作・栗田茂治の書簡は、近況報告や史料の貸し借り、問合せへの返答、現地案内の依頼などが中心となっている。櫻井順蔵は、宮城県岩出山町の人で『岩出山大観』などを著している人物である。櫻井の書簡は、大正11年(1922)11月30日付書簡から収められ、清治郎が所持していた伊藤東溟らの書簡の閲覧と借用に関してのものが中心である。この時の成果は、櫻井が編纂兼発行印刷人を務め、大正13年(1924)に発行された『伊藤東溟先生遺稿』に「高橋清治郎氏珍蔵」として紹介されている(伊藤 1924)。

次に柳田と関係の深いニコライ・ネフスキー、佐々木喜善の書簡である。ニコライ・ネフスキーは、ロシア出身の民俗学・東洋言語学・西夏語学者で、柳田の指導のもと民俗学研究を行っていた。ネフスキーは、柳田から少し遅れて8月28・29日に清治郎のもとを訪れている。ネフスキーは、清治郎から「片目の魚」や「ウンナンと鰻」、「ワカバの祟り」、「ザシキワラシ」、「河童」などの民間伝承を聞き取り、ともに佐沼町周辺の巫女とオシラサマの調査を行っている。ネフスキーは、この時の成果を柳田に書簡で報告しており、この書簡が柳田の『大白神考』に収録されている(柳田 1999、石井 2017)。ネフスキー書簡は大正9年(1920)2月20日付書簡から収められており、同時期にネフスキーが関心を持っていたオシラサマ研究に関するものが中心である。ネフスキー書簡は、ネフスキーが自分用の写しとして残したものが天理大学付属天理図書館に所蔵され、その中に清治郎宛が3通確認されている(岡 1971)。『来翰集』にはこの3通を含む9通が収録されている。

佐々木喜善は、柳田に『遠野物語』を語った人物であり、大正9年(1920)に玄文社版

『炉辺叢書』から『奥州のザシキワラシの話』を出版している。喜善からの書簡は、大正8年(1919)1月1日付年賀状から始まり、ザシキワラシに関する調査依頼が中心である。この時、清治郎からの提供された事例が『奥州のザシキワラシの話』に収録されている。

- (6) ただし、松本三喜夫氏は、37冊とする(松本 1994)。
- (7) ただし、遠野市立博物館に残る大正8年(1919)2月19日付葉書(佐々木喜善宛)はペン書きであり(遠野市立博物館 2007)、検討が必要である。
- (8) 未刊本のうち、胡桃沢勘内『福間三九郎の話』は昭和31年(1956)に筑摩書房から出版されるなど別の形で出版されたものもある(佐藤 2010)。
- (9) 前述の遠野市立博物館保管の喜善宛葉書では、自身の肩書を「宮城県史編纂登米、遠田委員」としており宮城県史編纂の調査も行なっていたことが想定される。

参考文献

- 荒井庸一 1996 「柳田民俗学の山脈：岡村千秋」(柳田国男研究会編『柳田国男・ジュネーブ以後』 三一書房)
- 石井正己 2015 「柳田国男の「豆手帳から」の旅の検証」(『テキストとしての柳田国男』三弥井書店(初出1996))
- 2017 「ニコライ・ネフスキー遺文抄(六)—[東北地方民間伝承ノート断片]—」(『ビブリア』 147)
- 伊藤東溟 1924 『伊藤東溟先生遺稿』(東溟伊藤先生遺稿編纂会)
- 岩手県立博物館 2015 『岩手県立博物館収蔵資料目録』(第27 考古X 小田島コレクション2次 その2)
- 遠藤源七 1934 「石巻付近古碑年表」(『考古学雑誌』 24(11))
- 遠藤源七・毛利総七郎 1953 『陸前沼津貝塚骨角器図録』
- 岡正雄編 1971 『月と不死』(平凡社)
- 胡桃沢友男 2004 『柳田国男と信州』(岩田書院)
- 小林文夫 1966 「鳥畑隆治をめぐる人々—国男・喜善・ネフスキー—」(『東北民俗』 第10 輯)
- 1987 「一ノ関と柳田国男」(『岩手県南史談会研究紀要』 第16 集)
- 佐藤健二 2010 「解題『炉辺叢書解題』」(『柳田国男全集』 22 筑摩書房)
- 佐沼古文書の会 2008 「会報」第505・506号(『古文書研究 会報六百號記念誌』)
- 佐沼高校百周年記念誌編集委員会 2005 『佐沼高校百年史』
- 鈴木岩弓 2009 「柳田国男と仙台」(『東北民俗』 第43 輯)
- 田野崎昭夫 2010 『遠野物語』誕生の事蹟考」(『人文研紀要』 68)
- 太布磯雄 2009 「異邦人が聞き書きした佐沼郷の民間信仰—ニコライ・A・ネフスキーの「書翰翻刻」を考察して(柳田国男あて調査報告書)」(佐沼郷土史研究会月例史談会発表資料)
- 登米郡役所 1923 『登米郡史』(上下)

- 高橋清治郎 1998 『南方村誌』（『南方村誌』を復刻する会（初出 1915））
 遠野市立博物館 2007 『ザシキワラシ』
 松本三喜夫 1994 「柳田国男と「爐邊叢書」（『柳田「民俗学」への底流』 青弓社）
 丸山久子 2000 「大正九年八月以後東北旅行：釈文」（『成城大学民俗学研究所研究紀要』
 24 別冊）
 三崎一夫 1997 「宮城県の民俗学二人の先学—高橋清治郎・布施千造」（『東北民俗』 第
 31 輯）
 1999 「柳田國男「豆手帖から」の旅について」（『東北民俗』 第 33 輯）
 南方町史編纂委員会 1975 『南方町史』（資料篇）
 1976 『南方町史』（本編 下）
 山内克之 1988 「『雪国の春』の旅」（柳田国男研究会 『柳田国男伝』 三一書房）
 柳田国男研究会 1988 『柳田国男伝』（三一書房）
 柳田国男・堀一郎 1948 『十三塚考』（三省堂）
 柳田国男 1964 「大正十一年日記」（『定本柳田国男集』 別巻第 4 筑摩書房）
 1964 「書簡」（『定本柳田国男集』 別巻第 4 筑摩書房）
 1997 『雪国の春』（『柳田国男全集』 3 筑摩書房（初出 1928））
 1999 『大白神考』（『柳田国男全集』 19 筑摩書房（初出 1951））
 2015 「大正九年八月以後東北旅行」（『柳田国男全集』 35 筑摩書房（初
 出 2000））

	名 前	収録数	備 考
1	岡上梁	11 通	旧制佐沼中学校長
2	木村梅太郎	1 通	旧制佐沼中学校教諭
3	伊勢齊助	1 通	仙台市
4	山中樵	1 通	宮城県図書館司書
5	半田卯内	7 通	登米郡長
6	松本彦七郎	9 通	東北帝国大学
7	齊藤養次郎	6 通	齊藤報恩会
8	柳田國男	5 通	民俗学者
9	ニコライ・ネフスキー	9 通	民俗学者
10	佐々木喜善	4 通	民俗学者
11	毛利総七郎	4 通	毛利コレクション
12	清水東四郎	12 通	東北学院大学
13	長谷部言人	3 通	東北帝国大学
14	三上喜市	1 通	
15	櫻井順蔵	6 通	宮城県岩出山町
16	加藤善作	5 通	東京府平塚村(現東京都大田区か)
17	栗田茂治	2 通	宮城女子師範
18	二木芳次郎	18 通	石森町(現登米市中田町石森)
19	千葉正太郎	1 通	北方村(現登米市迫町北方)
20	佐々木久四郎	1 通	北方村(現登米市迫町北方)

表 1 『来翰集』収録者

～職員人事異動のお知らせ～

平成 30 年度より館長及び庶務担当が異動になりました。

異動		着任	
館長	片岡 鉄郎	館長	小野寺 和伸
主幹	及川 昭彦	主査	只野 華織

今後とも職員一同よろしくお願いたします。

編集後記

「博物館だより」はいかがでしたか。今回は秋から春までの時期の取り組みをご紹介します。

春は出会いと別れの季節。館内でも人事異動による別れがありました。企画展をはじめ、講座や校外学習などで出会う人と人との縁を大切にしたいと願う今日このごろです。(宇藤)

登米市歴史博物館 博物館だより NO. 24

2018 年 6 月 15 日発行

編集・発行 登米市歴史博物館

〒987-0511 宮城県登米市迫町佐沼字内町 63-20

TEL 0220-21-5411 FAX 0220-21-5412

E-mail rekishi-haku@city.tome.miyagi.jp

URL <http://www.city.tome.miyagi.jp/rekihaku/>